私と読書

今西一（経済学科）

私の尊敬する民俗学者の柳田國男先生と比較するのは恐れ多いが、柳田先生も家が貧乏で、五人兄弟のために「日本一小さい家」に住んでいたと『自伝』に書かれている。柳田先生のお父さんは、播州（現兵庫県）の姫路藩の学者であったが、廃藩置県のために失業して、郊外の辻川村（現福崎町）に移られ、その家を柳田先生は、「日本一小さい家」と呼んでおられた。村では、柳田先生が生まれると祖母の松岡小鶴さんは、食い扶持を減らすために、川に身を投げたという伝説が残っているほどの貧しい暮らしであった。

柳田先生の慕っていた兄嫁も、貧乏に負けて家から逃げ出し、母の故郷の北条に移転するときも、家の柱や壁を持って移動し、北条に小さな家を移している。この北条で、松方デフレの飢饉を経験したことが、先生が後に農政学、民俗学を志す動機になっている。柳田先生は、貧しい人、差別されている人への関心を終生失わなかった。

私の両親は、交通公社の社内恋愛で一緒になり、そのまま勤めていれば、中産階級の家庭に育てられたのだろうが、父は祖父の助けで飲食店を経営し、意に沿わない仕事をやって、パチンコやマージャンなどの遊びごとが好きで商売を失敗し、私が小学校三年の時には、借金取りに追われて、私たち妹弟を連れて母の祖母の家に逃げ込んだ。

それこそ二間しかない「日本一小さい家」であった。しかし、この表現は、まわりの被差別部落やスラムの友人たちの悲惨な生活を見ていたら使えなかった。同級生のなかには、四畳半一間に、五人も六人も暮らしていて、大人は横になって寝られるが、子どもたちは京都市から払い下げられた、市電の吊革にぶらさがって寝ていた。この事情を知っていたクラスの担任は、さすがに子どもたちが授業中に居眠りをしていても注意できなかった。

部落差別を小学校で知らされた私は、隣のクラスの担任だった、中村拡三先生から、住井すゑの『橋のない川』などを読むようにすすめられた。それまでは、手塚治虫などの漫画が大好きで、三年生の時には、「漫画王」というあだ名がつけられていて、『冒険王』や『少年』などの雑誌に漫画を投稿して、将来は漫画家になろうと考えていた私に、読書の楽しみを教えてくださったのは、中村先生であった。

私は、宮沢賢治の童話のような子どもの読む本はあまり読まず、中学校では吉川英治、高校では司馬遼太郎などの歴史物の圧倒的なファンであった。彼らの翻案した『平家物語』『太平記』『太閤記』『三国志』はもちろん、高杉晋作、坂本龍馬、西郷隆盛、大村益次郎など、幕末・維新期に生きた主人公のものを読みあさった。

しかし高校時代にショックを受けたのは、郭沫若の『歴史小品』という作品との出会い

であった。中国の三国時代、楚の項羽が、落ち延びていく時、船頭が項羽の滅ぼした国の農民で、彼の今までの残虐な行為を挙げて非難する、という物語であった。もちろん架空の話であるが、その後、司馬遷の『史記』を読んで、項羽の民衆への残虐行為が真実だと知って、それからは英雄豪傑を賛美するものは嫌いになった。それにしても、司馬遷の冷静な歴史叙述には感動した。

それから高校時代に、よく読んだものに仏教書がある。森竜吉先生の『親鸞』を読んで感動し、増谷文雄先生のサンスクリット語からの直訳で、『阿含経』や『法華経』などを読むことに凝っていた。祖母の死を契機に、10歳ぐらいから生と死という問題をいつも考えていて、中学校のころは教会の聖書学校に通っていた。だが、キリスト教の「三位一体」説などは、いくら聞いても納得できなかった。それに比べて、ヒンズー教のカースト制度を批判して、「人は生まれによって尊からず、卑しからず。その行いによって、尊くもあり、卑しくもある」(『阿含経』)といった、釈迦の徹底した人間平等の思想の方に、はるかに惹かれていった。

高校、大学時代は、ありあまる時間があり、今と違って体力もあったので、ともかく食事もぬいて徹夜でよく読書したものである。特によく読んだのは、ロマン・ロランと魯迅であった。ロランの『魅せられたる魂』などは、それこそ二日ぐらい徹夜して読んだ記憶がある。一人の平凡な女性が、第一次世界大戦で息子を亡くし、反戦に目覚めて姿には、引きつけられていった。魯迅の『狂人日記』の「子どもを救え」という叫びは、今こそ重要だと考えている。

高校・大学の時代には、下鴨の文芸サークルや世界文学研究会に参加し、世界文学の古典を読んで、よく深夜まで討論した。バルザックの『幻滅』などの『人間喜劇』のシリーズや、アメリカ黒人文学のリチャード・ライトの『アメリカの息子』などが、特に心に残っている。体力がある時代に、ともかく大作の世界文学や古典を読め、というのが、私からの平凡な若い人へのアドバイスである。

最近の私は、晩年のバルザックと同じように、糖尿病で目が悪くなってきて、細かい活字が読めなくなってきたため、徹夜で見ているのは、韓流時代劇のDVDが多い。1980年代の民主化闘争をたたかった韓国の監督たちの作る作品は、日本の時代劇などと違って、はるかに社会性が高い。そして『トンイ』や『済衆院』など、賤民や白丁(ペクチョン)といった被差別民を主人公にする名作ドラマが作られている。日本でも英雄ではなく、被差別民衆を正面から描いた大河ドラマや朝ドラを、NHKがやってくれる日が来るのだろうか。一度、見てみたいものである。